

開催報告

五十嵐力氏寄贈書作品展

『書家五十嵐如泥(師と友)』
同時開催『明治の三筆・比田井天来とその門流』

滝上町社会教育委員の会議
委員長 黒田和俊

このたび東京都在住の書宗院参
与理事五十嵐力氏のご好意により、
300点余の掛軸をはじめ多くの
書作品および関係の書籍を滝上町
にご寄附いただいた。これらの作
品および書籍は、いまは亡きご尊
父五十嵐文伍(号如泥)氏が、ご
在世中収集・収蔵されたものであ
る。その内容は書道関係のみなら
ず、さまざまなジャンルの方々と
長年にわたっての交流から得られ
たものであり、その多くは書道家
垂涎の貴重な芸術作品である。ま
た、それらは北海道書道界にとっ
て、歴史的にも非常に価値の高い
文化財ともいえる。

この度の作品展は、この寄贈を
記念して五十嵐氏寄贈作品29点と
町所蔵の書作品4点を一般公開し
たものである。

5月27日、作品展開催に先立ち
寄贈者の五十嵐力氏とご家族、
書宗院参与理事の関雲外氏、元書
宗院副理事長の天津童州氏など9
名のご来賓、そして町内ご来賓を



除幕式後の記念撮影

※中央が五十嵐力氏ご夫妻、
左から2人目が天津童州氏

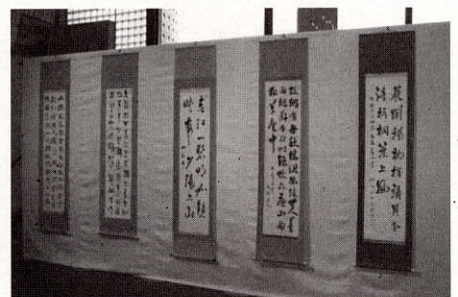
お迎えし、除幕式を開催したので
ある。

○寄贈者 五十嵐 力氏について

五十嵐力氏は、昭和7年7月22
日、北海道札幌市に書道家五十嵐
文伍(雅号如泥)氏の子息として
生まれ、幼少のころから書の薫陶
を受け成長された。昭和33年法政
大学を卒業。現在は書道団体「書
宗院」(創設者は桑原翠邦)の参与
理事として活躍されている。
また氏の父、文伍氏のプロフィール
については「たきのうえ墨客

展・北海道出身作家展(北海道を
代表する戦後書壇の巨匠)のお
り、教育委員会発行の作品者紹介
の欄に掲載されているので、ここ
に紹介したい。

「五十嵐如泥(いがらし じょ
でい)明治40年1月福島県岩瀬郡
長沼町にて出生。明治44年に父母
と共に現在の十勝足寄町に移住。
大正10年札幌鉄道教習所普通部に
入所。この時に鉄道省札幌鉄道局
書記であった大塚鶴洞先生より書
道を習う。桑原翠邦、金子鷗亭は
同期同級。昭和2年川谷尚亭来道
の際、書会に参加。後に川谷尚亭
発刊の「書之研究」誌などにより
研鑽。昭和4年比田井天来来道の
後、「書勢」、「書道春秋」等により
研鑽。昭和20年10月紋別町小向に
入山、管農。紋別市在住中は紋別
市書道同好者連盟代表理事、紋別
市文化財調査委員会会長、道東書
道展実行委員長の公職に就かれ、
昭和42年には紋別市文化連盟賞、
昭和47年には北海道文化財保護功
労賞などを受賞されている。平成
元年10月15日死去。享年82歳」
とある。北海道における書道の先
覚者大塚鶴洞の薫陶を受け、その
縁によって関西書道大家川谷尚亭
の指導を受け、また近代書道の父



ともいわれる比田井天来の知遇を
得ていることを特筆したい。札幌
鉄道教習所での学友には桑原翠邦
氏や金子鷗亭氏がおられ、多くの
同窓諸氏と共に書道を志され、研
究会を発足。この会は、日本の書
道界で「書道王国北海道」と称賛
される書道興隆のさきがけとなっ
た。

現在、北海道には全国的に名を
成す書家が活躍しているのも、こ
の結実・成果であることは、札幌
市教育委員会編「さっぽろ文庫53
『札幌と書』(北海道新聞社発行)
に詳しく写真入りで掲載されてい
ることからも容易に理解できる。
これらのことから北海道を代表
する書家たちと、大正・昭和・平
成と最晩年にいたるまでの親密な
交流が、貴重で得がたい書作品の
所蔵に繋がったものと考えられる。

また戦後、文伍氏はご家族とともに紋列市小向に入山し、農業に従事した。その後、地域の人々に請われて書道を指導・教授なされ、さまざまな文化事業に尽力された。また、永年の功績により、紋列市より第一号の文化功労賞が授与された。他方、スポーツ振興においても尽力されており、有名な南部忠平氏と古くから親交があったと伺っている。ちなみに、このたびの寄贈目録の中に南部氏の貴重な写真も含まれていることも付け加えておきたい。

さて、これら文伍氏の收藏せられる作品の継承者であるご子息力氏と滝上町とのご縁は、平成17年5月滝上町教育委員会主催で開催された「たきのうえ墨客展・北海道出身作家展」北海道を代表する戦後書壇の巨匠」において、この企画に協力された力氏から多くの貴重な書作品を借用したこと、に始まる。この仲介の労をとられたのは、滝上町の書道愛好家と交流のある紋列市在住の中張英夫氏（五十嵐文伍氏の門下）であった。

墨客展には、書宗院代表桑原呂翁氏のご配慮により、副理事長（当時）の天津童州氏の招聘がかない、揮毫会が開催されるに至った。

その後、力氏は毎年來町されており、ご家族の方々も当町に來

れるなど町民との交流を楽しまれてきた。そのような中、当町および町理事者はじめ教育長、教育委員会の芸術文化に対する理解と造詣の深さにいたく心動かされたのであった。



平成20年に挙行された『滝上町100年祭』の折には、当町に六曲一雙屏風を揮毫し寄贈された書宗院副理事長（当時）天津童州氏とともに町から招待されるなど、滝上との縁がますます深まり、文化の薫り高い町の気風と文化財を愛し大切にされる人々との交流によって、力氏が継承してこられた書作品を寄贈されることとなった。

力氏は滝上町を愛するお気持ちから、文化芸術の将来性を鑑み、当町に託されたものと思われる。

このお気持ちにいささかでも応えるべく、企画・展示のみならず

社会教育・生涯学習のさまざまな観点から学習の方途・活用を考えたいかなくてはならないだろう。このことが強いては、オホーツク要の地であるわが町の文化向上・発展に繋がり、やがては近隣市町村、北海道、全国へとさまざまな広がりを見せてくれるものと確信するしだいである。

拝啓 水無月の候 御健勝にて御活躍のことと存じます。私共無事帰京致し頑健にて消光致して居りますので他事乍ら御放念下さい。さて、この度の滝上展では、身に余る接遇をお受け致し恐縮至極に存じます。心より厚く御礼申し上げます。

これ程の大規模の、しかも質の高い書道芸術の展覧会を開催することは、並大抵の御努力では不可能と思われませんが、スタッフの御尽力により企画から開幕まで、驚異的英知を結集された会場を観ることが出来ました。

童州先生と雲外先生が驚きの余り「中央でもこれ程の高いレベルの展覧会は観ることが出来ない、もっと時間をかけて鑑賞したかった」等としきりに申されて居られました。小生としても、肝に銘ずべき言葉であり、大変嬉しく思った次第です。

書道人口が町の一割と伺い、こういう例はおそらく滝上町が日本一の書道の町を示す数値と思考致します。寄贈作品、資料及び文献が今後共、滝上町の方々の資益となれば幸いで御座居ります。滝上町から、書道芸術の素晴らしさを、日本全国に発信して下さらんことを祈念し御礼と致します。

帰途、滝上町の御厚意に甘えて、遠軽の家庭学校、上湧別の屯田兵博物館、小生らが終戦後入山した小向の畑や山林のその後、紋列市のまちなか芸術館、流水科学館など見学した外、紋列市の書道愛好家をお会いして、有意義な日を過ごさせて戴いたことを付記して御礼と致します。未筆乍ら皆様の御健勝を祈念し、滝上町の御発展を心よりお祈り申し上げ、滝上町展参上の御礼と致します。

敬具

二〇一二年六月三日

五十嵐 力